
壊れた時間

浦ばんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた時間

【Nコード】

N8944G

【作者名】

浦ばんだ

【あらすじ】

ある少年と、彼に呼ばれるように廃校に引き寄せられる人達。彼らは、一体何を見るのか。そして、帰って来れるのか。

廃校で（前書き）

この作品は、気分を害するような表現が入っています。読まれる方は自己責任でお願いします。

廃校で

ある廃校の中でのこと。

僕はさっきから、長い廊下を歩いていた。

因みに僕が今歩いているところは、足元は保証されていない。

いつ崩れてもおかしくなかった。

それを示すかのように、腐った木の床は、所々穴が空いていた。

きっと、今までに来た誰かが、穴を開けてしまったか、或いは落ちてしまったのだろう。

でも、それは僕にとって、関係無かった。

だって僕は、もうこの世界に居てはいけない存在だから。

でも僕の足はしっかりとしているし、身体も透けてなんかいない。

ついでにいうと、人と普通に触れ合ったり話したり、ということも出来る。

ただ、普通の人と違うのが、僕の周りを発光している球体が幾つか飛んでいること。

それらは僕とは違い、人は触れることが出来ない。

つまり、俗にいう「魂」というもの。

ここで話が少しばかり逸れてしまいが、魂達について話させても

らいたい。

それらは増えたり減ったりする。

意思を持つものも居るし、意思を持たず、只ふわふわと漂っているものも居る。

時には擦り寄って来たりするから、結構可愛い奴らだったりする。

5

僕の側に居ないだけで、この建物内には、こいつらと同じ奴らがたくさん居て、肝だめしに来た人達を驚かして遊んでいる。

肝だめしに来た人達から見れば、火の玉がたくさん飛んでいる光景を目の当たりにするんだから、吃驚程度じゃ済まされないんだろ
うな、と、この建物内から逃げていく人達を見ながら思ったりする
んだけど。

話を元に戻そう。

僕が今歩いて居るのは二階。

現役時代も、廃墟となり朽ち果てるのを只待っている今も、この二階の無駄に長い廊下はある噂があった。

この廊下の別名は『無限廊下』。

その名の通り、夜何時に通るとどんなに頑張っても突き当たりに着けない、とかそういう奴。

まあ、それは元を辿れば現役時代から此処に住み着いている僕が遊びでやってることなただけ。

その中には、「着けない」って泣き出す子も居た。

その他には、無理に歌って自分を元気付けている子も居た。

……正直言つて煩かつたから、窓をがたがた鳴らしたら歌つの止めたけど。

大抵の人は魂を見ただけで逃げ出した。

赤とか青とかあつて僕は綺麗だと思っただけだな。

あ、また誰か来た。

女の子一人と男の子が二人。

少しばかり厄介だ。

少し前も女の子一人と男の子二人が入って来たけど、男の子二人の内一人が女の子に襲いかかってかなり煩かったんだよな。

よくよく見れば、男の子二人はこの前来た二人と同じだった。

別に人間を好いている訳じゃないけど、助けに行こうかな。

荒らされたら困るし。

「おいで、行こう」

廊下を歩いている最中、彼らを見つけて僕が立ち止まっていた前の教室の中で遊んでいた魂達に声をかける。

魂達はすぐに反応を示し、此方に来た。

魂達は五つ程僕の所へ飛んできた。

残りは此処で待ち伏せするらしい。

「後は任せたよ。

僕はこいつらと行くから、その三人が此方に来たら適当におどかしておいて。

あ、三人中二人は此処に来るの二回目だから。

このこと他の奴らにも教えておいて。」

僕はそれを教室に残っている魂に言い、早く、と急かすように僕の周りを飛んでいる魂に目配せした。

それを合図に、四つの魂がばらばらに飛んでいき、一つは下に、一つは上に、一つは正面、一つは後ろ、という風に分かれていった。

「じゃあ、僕らも行こうか」

残った魂に言って、再び僕は歩き出す。

彼らは案外早く見つかった。

途中で幾らか呼んだのか、彼らの周りにはかなりの数の魂が困っていた。

僕は、男の子二人の間で震えている女の子を見て、その次に自分に憑いて来た魂を見る。

「あなただけは助けますから。

これについて行って貰えますか？」

「な……っ」

女の子だけ助ける、という言葉に反応したらしい帽子を被った男の子の方が短く声を上げた。

僕はそれににこり、と笑いかける。

魂は半分放心状態の女の子を連れ、三階から降りていった。

「あなた方は二回目、ですか」

「そ、れが何だっつてんだよ!!」

「二回来ちゃわりいのかよ!!」

僕は静かに一歩、彼らに歩み寄る。
床が、ぎしり、と音を立てる。

「僕の記憶が正しければ、もう来ない、と約束した筈ですが……
はて、違いましたかね」

首を傾げ、彼らに問う。

「約束なんかしてねえよバーカ!!」
「………そうですか。」

では僕の思い違いだつたと、あなた方は言いたい訳ですね。」
「……っ!!」

僕が身体に纏った空気の意味が分かつたらしい。
眼鏡を掛けている「男」が、びくりと肩を震わせる。

「さて、どんな物をあげましょうかね。
まあ、まずは拘束させていただきますので。
それから考えましょう。」

僕は笑っている顔をそのままに、彼らに言う。

次の瞬間、魂は一つ一つが細い糸状になり、一人ずつ縛り上げる。

「苦しくは、ありませんね？
苦しい、という演技をしても無駄というものですが。
あ、いいこと思い付きました。」

僕は一人で話を押し進める。

「勝手だとは思いますが、あなた方を磔にしようと思います。此処にはあまり人を寄せ付けたく無いので。」

此処に来た人間はこうなる、といういい示しになりますよね。なに、磔と言ってもそんな酷いことをするわけではありませんよ。只、どちらか一人は今すぐ消えて貰うことになりましたがね。」

「反論は、ありませんね？」

彼らは無言でこくり、と頷く。

その身体は恐怖に染まりきっていた。

がたがたと震え、先程の威勢など当に消え失せている。

「了承いただけましたし、そろそろ始めましょうか。」

おいで、クロ」

僕が言うと、教室からのそりと黒いものが顔を出す。

口以外は真っ黒で、だからクロと名付けたんだけど。

- - - - -

クロは普通は霧状だが、今日は人形の気分らしい。

おあずけを食らって居るような犬の様に静かにそこに立っていた。

「いいよ、食べて。

でも、魂は残してね。」

食べたくてうずうずしているクロに向かって言うと、僕をすり抜け、まずは眼鏡の方に噛みついた。

「っ!!」

恐怖に染まっていた顔が一気に苦痛に染まる。

血は、出ない。

帽子の方は、目の当たりにしている光景が信じられない、という風に僕とクロを交互に見ている。

噛みつかれた眼鏡の方は段々と顔が青白くなっていく。

絡み付いていた魂が離れる頃には、彼は「しぼんで」「いた。

つまり、骨と皮だけ、という感じだ。

「クロは吸血鬼みたいなものなんです。

吸うのは血だけじゃないですけどね。

骨と皮以外全て吸い尽くします。

良かったですね、クロがあなたを選ばなくて」

僕は残っている男に笑いかけて、吸われ尽くされた男を外に運ぶように目配せした。

「……さて」

僕は残った魂をちら、と見て、球状に戻っている幾つかに小声で指示を出した。

あるものを持って来るように、と。

「ふふ、どうしますか？

何で手足を繋ぎ止めます？

針金？糸？釘？小刀？

色々ありますよ。

此処は学校でしたから鋏も探せば有るかも知れませんね。

あなたに決めて貰いましょうか。

あ、十分以内でお願いします。」

男は暫く迷っていたが、僕が時間切れであることを告げた途端、一瞬にして表情が無くなった。

うまく言えば、顔面蒼白、だ。

「じゃあ、小刀にしますね。」

「な、」

「一人は痛みをさほど感じなかったんですから、いいですよ。では、持ってきます。」

あ、動いたらなおさら痛みを与えますよ。」

僕が脅迫すれば、男は喉をひくり、と鳴らせた。

「押さえつけて。」

そう、そういう風に。」

僕は今、二人目を磔にしている。

魂に男を押さえているように指示をして、持ってきた小刀を手首に刺す準備をする。

「や、やめっ」

「やめる気なんかさらさらないですよ」「
許してくれ……!!」 「イヤです」

拒絶を示した瞬間、男は魂が抜けた様な顔をした。
実際抜けたのかも知れないけど。

「じきに魂を抜きますから。
痛みは少しだけ、だと思えます。
まあ、人各々ですから。」

僕は笑顔を絶さず、大鎌を取り出す。

床に礫にされた男に向かって、勢いをつけ大鎌を振り下ろす。

飛び散る血飛沫。

幾つかは顔や服についてしまった。

男は絶命し、身体から淡く光る球体がふわりと浮かび上がる。

僕はそれですら大鎌で切り裂いた。

魂は一瞬で消えた。

外にいる男の方はどうなったのだろうか。

死んでいるのは間違いないが、まだ魂を潰していない。

外に出ると、雨がぱらついていた。
この分ならすぐに血は落ちるだろう。

干からびた男の側に行くと、魂は男の身体に引っ掛かっていた。
一応外に出ようとしているのか、前に進みたい、という気持ちを感じられた。

「……………」

僕はそれを無言で見つめた。

本当は今にでも潰したくて仕様がなかったんだけど。

僕がそうした理由は、この男の魂が苦しんだ拳げ句に消える、その瞬間が見たかったから、そうだったのかも知れない。

暫くして、男の魂は身体から抜けずに消えた。

僕は息をついた。

これ以上こいつらに鎌を汚されたく無かったし。

第一に、この二人は強姦魔で、この前の女の子もその被害者だった。

僕が今日の女の子を逃がしたのは、二人がそういう奴らだったから、かもしれない。

.....

「クロは温かいね」

僕が薄れていく意識の中、ぼんやりとそういうと、クロは口角を上げた。

つられて僕も笑う。

「今日は特に嫌だったな。
クロはそう思わない？」

呟くと、クロはこくり、と頷いた。

意識が黒く染まっていく。

それはクロが僕の身体を包んだから、なんだけど、そうされると尚更クロがいとおしく思えた。

「おやすみ、僕の鎌」

クロに抱かれながらそう言って、やがて僕は眠りに落ちた。

第二話 少女と死神（前書き）

この作品は少しばかりグロテスクな表現があります。ご了承くださいの上、
ご閲覧下さい。

第二話 少女と死神

もう、ずっと昔のことだ。

僕がぎりぎりで覚えていられる程昔にあったこと。

僕は、一人の少女に出会った。

「私、もう少しで死んじゃうんです」

そう言った少女は、笑顔で。

「怖くないの？」

僕は思わず少女に問う。

だって、死ぬ、ってことは、自分の存在が無くなってしまつてしまつてしょう？

「全然、怖くない。

自分がいなくなるのにね。」

そう言って、くすり、と笑う。

「僕は怖かったよ」

「そう」

「……男なのにね」

「みんな死ぬのは怖いよ」

「でも、君は怖くないんだろ？」

「個人差」

「そういうものなのかな」

「多分、ね」

そこまで言い、話し疲れたらしい少女は、ベッドに埋もれる様に身体を後ろに倒す。

「疲れた？」

「ちよつとだけ」

「……そう」

僕はそれだけ言って、無言になる。

少女は僕を見据えたまま、無言になる。

沈黙を破ったのは、僕だった。

「……黙られると困るし、後、そんなに見られても困る。」

「ごめんなさい、ついやっちゃうの」

「昔からの癖？」

「でしょうね。」

ほら、病院って暇じゃない。

やることと言えば、手術とか治療とか食事とか。

暇潰しと言えば、誰かと話すこととか本を読むことぐらいしか無くて。

「……へえ」

「あ、でもね、誕生日はお母さんがちっちゃなケーキ買ってきてくれるの」

「そう」

僕が短い返事をしないことに何か思ったのか、少女は眉をひそめた。

「…………お腹でも痛いのか？」

「違うよ」

「そう？」

「じゃあいいけど」

たとえ口が裂けたって、「僕は死神で、君を殺しに来ました」、なんて言えるわけ無いだろ。

「…………あなた、」

「うん？」

「死神ね？」

一瞬窓の縁から落ちかける。

「……………何で分かったのか？」

「何で、って」

そんな長くて黒いローブ着てて、そんな大きな鎌持ってたなら、死神です、って言ってるようなものだよ？」

僕はそれを否定するように言う。

「……………サタンかも知れないだろ」

少女も言い返す。

「サタンはもっと怖いよ」

僕はそれを聞いて、ため息をつく。

「幸せが逃げるよ、死神さん」

再び笑顔。

どうしてそんなに笑って居られるのだろうか。

「君は強すぎる」

「何処が？」

「何処って、口がさ。

おしゃべりな上に屁理屈をこねるのもうまい。」

僕は少し挑発的に言う。

「あらそう」

少女は何でも無い、という風に言う。

「あ、暇潰しでもう一個あった」

君は空気と言うものが読めないのか。

……まあ、もともと読むものじゃないけど。

「星を見るの」

「……星？」

「そう、星。

綺麗だよ。特に月の無い新月は。」

「僕は月の方が好きだけど」

「そうね、死神には月が似合いそうね」

僕は一体何を話しているんだ。
さっさとこの少女の首を跳ねてしまえばいい。

それなのに。

身体がそれを拒否していた。

「あれがオリオン座、とか、自分に言い聞かせてる」
「そう」

自分の体の筈なのに、とてつもなく重い。

嗚呼、どうして。

少女の話をぼんやりと聞きながら、頭に浮かんでいる考えを必
死に消そうとしている。

まさかそんな筈が。
あるわけない。

あるわけない、筈なんだ。

「で、死神さん」

少女が首を此方に向け、にこりと笑う。
笑いながら、言う。

「私を殺さない決心はついた……？」
「……は……」

息が苦しい。

こんなにも苦しいと感じるのは死んだとき以来だろうか。

冷や汗が、背中を伝う。

少女の表情は変わらない。

笑ったままだ。

その笑顔は、本当に本物……？

「　　っ！！」

自分の叫び声で目が覚める。

「……？」

焦りながら傍らに居るクロを確認し、ほっと息をつく。

どうして僕はあんな夢を見たんだ？

なんで、あんなに昔のことを。

まだ、死神になりたてだった頃のことだ。

あのあと、少女の顔は溶け始めて、顔の一部だったものがベッドの上や床に落ちて。

皮膚の下の赤い肉や、剥き出しになった眼球や、まるで気が付いたように急に溢れ出す血や。

色んなものが思い出された。

どうやら彼女は忘れさせてくれないらしい。

一人静かに笑っていた彼女。

その笑みは嘘か真か、ついに分からなかった。

ついでに言えば、彼女の最期も。

すべてが曖昧になっていて、もうとっくに忘れたと思っていたのに。

魂が何かを感知していたらしく、僕の周りに集まり始めている。

「何でもないよ。

起こらせてごめんね」

そう謝ると、すうっと消えていく。

それぞれの持ち場に帰っていったのだろう。

僕は最後の一つが消えるのを見送った後、眠っているクロを一撫でして、再び眠りについた。

第三話 昔の記憶（前書き）

この小説には、気分を害するような表現があります。閲覧時にご注意ください。

第三話 昔の記憶

身長、150センチ程。

こつして見ると、かなり背が小さい。

「背が小さい、なんて失礼な」

その事を言ったらほつぺたを膨らまして拗ねた様な顔をする。

かなり可愛いんだが、こいつ、男だ。

いつそのこと性転換でもすれば良いのに、と思ったことが何度かある。

当然の如く拒否されたけど。

仕草も女っぽくて、同性から襲われたことも何度かある。

俺が全力で止めたけど。

そいつはアリス、っていう名前を持っていた。

ただ、噂によれば、その名前は当の昔に捨ててしまって、今は名無しになっている、らしい。

今から少しばかり、昔のことだ。

「先輩っ」

がばっ、と後ろから抱きついて来たのは、アリスで。

「うおっ!?!」

いきなり抱きつかれたものだから、当然バランスを崩し、床に倒れる。

「先輩だいじょぶですか?」

「大丈夫な訳あるか、この馬鹿」

そう言っアリスの頭をべしっ、と叩く。

「痛いです!!」

後輩が大事じゃないんですか!?!」

「普通にお前が抱きついてこなければよかったと思うんだが。」

ぴーぴーと喚くアリスの頭をもう一度叩き、俺は鎌を手にする。

「先輩仕事入ってるんですか?」

「そうだよ」

ついでにお前もついてくる」

「ついで、って僕はオマケかなんかですか」

「そうだよ」

きっぱりと言っ、一気に表情が崩れていく。

しまいには泣き出した。

「先輩、ひどいで、すつ

僕、先輩のこと、う、信じてた、のに……っ」

「あーもー悪かったから

ほら、泣き止め。

なんか滅茶苦茶蔑んだ目で見られてるから」

「そ、れは、先輩が、でしょう?」

「うー、ん

……とにかく!

ほら、行くぞ」

「えー」

「えー、じゃない」

嫌がるアリスを無理矢理引っ張って俺は仕事に向かった。

「先輩の、大きい……」

「……それ言つと違う意味に捉えて過剰に反応する奴いるからやめる」

俺の鎌を見て、呟いたアリスに、そう突っ込み、俺は建物に向かつて歩き出した。

上の話によると、この廃校は現役時代から霊が住み着いているとか何かで前々から依頼が来ていたのだが、何故かみんな嫌がり、誰も引き受けずにここまで来てしまった、らしい。

「雰囲気ありますね」

「無かつたら萎える」

「な……!?!」

「そういう意味じゃねえ、やる気だ、やる気」
「まさか先輩、この廃校で僕を……!？」
「違っつてんだろ」

俺はこいつを一日に何回叩けばいいんだ。

.....

「蜘蛛の巣がいっぱいありますね
つてうわ、なにあれ」

「ちったー黙れ」

「先輩先輩、あの蜘蛛の色かなりエグいですよ!!」
「一旦蜘蛛から離れる」

アリスはそこらじゅうに張り巡らされている蜘蛛の巣や、見たことも無い蜘蛛や、虫やらを指差してきゃあきゃあ言っている。

この廃校の中に入ってからずっと、だ。

「あ、そうだアリス
ここにいる奴さ、器が欲しくて現役から居るんだけどさ、獲られな
い様に注意しろよ」

「何をですか？」

「人の話を聞いてる。」

器を獲られんかって言ってるの」

「身体を、ですか？」

「獲られたらもう帰れなくなる。」

俺らの場合は墮ちるな」

「本当ですかそれ」

「自分の命がかかってるってのに何で嘘をつくんだ」

「それもそうですね」

アリスはそういうと、急に鎌を取り出した。

「お前は見るだけなんだぞ？」

「先輩が器獲られたら僕はどうやって身を守るんですか」

それもそうだな、と言おうとしたとき、視界の隅で何か素早く動いた。

「「!!」」

アリスと俺は身を固くする。

この時間帯に人なんか居るのか？

人だったとしても、あの素早さは出せても、天井を這う、なんてことは流石に出来ないだろう。

だとすれば、かなりでかい蜘蛛、とか？

いや、あの動きは確かに人の動き方だった。

では、残ったのは。

「先輩、」

アリスの声が珍しく緊張している。

「僕の首に何か絡み付いて居るんですけど、どうしましょう」

「!?!」

俺はアリスのその声を聞いて、慌てて振り返る。

アリスの首には、手が絡み付いていた。

「っせん、ぱ」

アリスは首を絞められて居るようで、苦しそうな声を出した。

「っ!?!」

アリスの悲鳴。

ごきん、と、何かが折れた音。

アリスを見ると、首があり得ない方向、真後ろに曲がっていた。

「っ!?!」

俺は息がつまるのを感じた。

身体が動かない。

呆然としてみると、動かない筈のアリスの首がぎぎぎ、と無理矢理前を向いた。

でも折れているから、すぐにかくん、と右に少しばかり折れた。

「きゃはははは!?!」

「あ、りす……?」

「ボクはもうアリスじゃナイよ!?
アリスのカラダはボクがもらった」

ひどく不自然な言い方で、アリスが言う。

いや、違う。

これはアリスじゃない。

「あたり

そうだよ、ボクはもうアリスじゃナイ

ボクの名前はもうないヨ……?」

傾いていた首がぎぎ、と音を立てて、元の位置に戻る。

真っ直ぐにたった首はもう傾いたりすることは無いようだ。

俺を見て、アリスの落とした鎌を拾い、にたり、と笑う。

「サヨナラ、先輩」

ひゅっ、と風がなる。

ああ、俺、死ぬのかな、って。

そんな考えが頭をよぎる。

「この馬鹿!!」

急に後ろから聞こえた声にびくり、と肩を震わせた。

その影は、俺の横を通りすぎて、俺に当たる寸前だった鎌を蹴りあげ、ケタケタ笑っているアリスだったそれに、刃を刺す。

血飛沫が飛び散って、その影は、帽子屋は血をモロに被る。

「アリス、」

「こいつはアリスじゃねえよ

よく見やがれ、馬鹿が」

アリスだったそれは、かなりの血を出しているのに、未だケタケタと笑っている。

俺はぼかん、とその光景を見ていた。

「おら、逃げんぞ」

「でも、アリス、が」

「アリスはもう存在しない。」

俺はその言葉を聞いて、アリスが器を獲られ、堕ちてしまった、と
いうのを理解した。

アリスは、アリスだったものは血を流しながら砂になっていく。

アリスが、消える？

「い、やだ、放せ……」

「おい、チエシヤ？」

「嫌だ、アリス……っ」

「行くぞ、ほら、」

半ば無理矢理に俺は帽子屋と一緒にそこから離れた。

崩れ落ちていくアリスを見ながら。

「言っただろ、吞まれたら、食われちゃったら、器を獲られたら、もう戻れないって

アリスはお前より小柄だからな、奪いやすかったんだろう。俺の推測だけだな

とりあえず、俺らの知ってるアリスには、もう会えない。

アリスはここに残り続けて、魂潰しになる。

俺らが『生かす死神』と言えるなら、あいつは『殺す死神』になる」

アリスが、人殺しになる……？

嫌だ、そんなこと。

「とにかく、ここから離れるぞ

俺らもここにいたら危ないんだからな」

俺の腕を引っ張ろうとした帽子屋の腕を払う。

「……嫌だ……」

「嫌だ、じゃねえ」

「いい先輩なら、後輩に付きまとわないぞ？」

「アリスは生きてるかも知れない」

「無理だ」

「どうして……？」

「アリスの魂が消えた」

俺も薄々感じていた。

でもそれがアリスの魂だなんて信じたく無かった。

「上に報告しに行くぞ」

「……チエシヤ？」

「……」

俺は、頬を伝う水を、指で拭うこともせず、地面に落ちるまで見ていた。

結局、アリスは事故、ということ、話がまとまった。

事故じゃないのに。

俺がもう少しアリスに気を配っていたら最悪の事態は避けられただろくに。

「アリス……」

ぽつん、と呟いた言葉は誰にも届かず、無駄に広くなった部屋に静かに響いた。

「う、ぐ……っ」

僕はまた、人を殺した。

誰だったか忘れたけど、僕のことを殺す死神とかなんとか呼んだ人がいた。

首を絞めあげたその人の身体から魂が抜け、それがクロに食われるのを見ながらぼんやりと僕は考えていた。

その他にも、僕には「先輩」と呼べる人がいた気がする。

かなり昔のことだから、もう忘れてしまったけど。

どちらにせよ、その時の僕は回収した魂を勝手に持っていて、近々追放される予定だったから、この時にあの霊に捕まって殺されたのは、僕にとっては運がいいと思った。

死神に殺されて、跡形もなく消えてしまうよりは、霊に捕まり殺された方がマシだ。

だとしたら僕はこの世界に残りたかったのだろうか。

僕は考えながら呟く。

「アリス……」

誰もいない空間に向かって。

昔捨てた、自分の名前を。

クロは黙って、僕を見ていた。

第三話 昔の記憶（後書き）

僕の手違いで一度消してしまいました。ご迷惑をお掛けしてすみません。

第四話 再会（前書き）

この小説には、気分を害するような表現があります。閲覧時にご注意ください。

第四話 再会

「クロ？」

どうしたの、そんなに震えて」

僕が何となく部屋の隅に目をやると、人の姿をとったクロがかたかたと震えていた。

それは、純粋な恐怖から来るもの。

僕はまるで見当がつかなかった。

だって、彼がこんなに震えることなんて、今まで一度も無かった。

泣いたことはあったけど。

そこで僕はやっと異変に気付く。

部屋に必ずいる筈の魂が、一つも居ない。

消えたとしたら、薄い霧のようなものが消えたところに暫く漂っているから、消えた、という線は無い。

僕と同じ奴に消されでもしなければ。

……嫌な感じがする。

僕以外の『何か』が、この建物内に居る。

人じゃ無いことは、確かだ。

人ではこんな嫌な感じはしない。

霊媒師や霊能力者は、肌にちりちりとした僅かな痛みを感じるだけだから。

強い力を持っていたとしても、クロが怯えることなんか無い。

では、何がいる？

僕はそこまで考え、そしてそれを中断した。

足音が聞こえる。

それに混じって、何かの話し声。

それらは僕が今居る教室の前でぴたりと止まった。

呼吸の音すらも、この場では煩く思えた。

それは入ってこない。否、入ってこれない。

僕がそういう風に仕掛けたから。

木の戸はがたがたと揺らされている。

「……………」

何も言わない。

それは僕も向こうにいる何かも同じこと。

でも、クロは相変わらず部屋の隅で怯えて居るし、小さな話し声も聞こえてくる。

一体どうしろって言うんだ。

僕はそう思いながら、不自然に疼き出した胸の古傷を服の上から押さえた。

その時、がたがたつ、と戸が大きく揺れた。
どうやら無理矢理入ってこようとしてるみたいだ。

「ひ、い……………」

クロが小さな悲鳴を上げ、耳を手で覆う。

そんなに怖い『何か』がこの戸の向こうに居るのか。

僕がそんなことを考えている時も、戸はがたがたと揺らされていた。

「……………」

聞こえたのは舌打ち。
なかなか開かないことに苛立ち始めたんだろう。

「クロ」

僕は小さな声で彼を呼んだ。

「逃げるよ」

続けて言う。

クロは震えながらそれに小さく頷く。

僕はなるべく足音を立てないようにクロのところへ歩いて行った。

でも、逃げる、ということは出来なくなってしまった。

僕がクロのところについた途端、大きな音を立て、戸が吹っ飛んだからだ。

「っ……！！！」

恐怖が最高潮に達したらしいクロは、声にならない声をあげ、床に倒れる。

「はあ、俺ってば嫌われてんだな」

砂ぼこりが舞う中、戸を吹っ飛ばした本人が声を出す。

その人影の後ろからは魂がわらわらと溢れるように姿を現した。

話し声の正体はきつとこいつらだろう。

「っげほ」

その人影はわざとらしく咳をして、砂ぼこりから姿を現す。

「よ、少年」

馴れ馴れしく僕に声をかけたのはフードを着ている男。

「早速だが死んでくれ」

出会ったばかりでこんなことを言ってくるなんて、どれだけ自分を過信して居るんだろうか、と思ったけど、それを言う暇は無かった。

男がフードのポケットから取り出したのは、液体が入った瓶。

僕はそれを見て、瞬時に危険を感じ取った。

あれは、硫酸か？

間違いなく只の害の無い液体では無い。

もし僕の予測があっているとすれば、人がその液体を被ってしまえば、跡形も無く消えていってしまうだろう。

僕はいいけど、クロは実体がある。

被ってしまえば、何らかの影響を受けるだろう。

僕は倒れているクロを庇うような姿勢をとった。

それを見て、男がにや、と笑う。

「少年の推測は当たりだ。

ただ、それを自分の身を呈して庇ったということは、俺の推測じゃ少年は実体が無いな」

男はそういつて、くつくつと笑う。

不気味な笑みだった。

ひとしきり笑った男は手にしている瓶の蓋を開け、中身を僕に、或いはクロに、かけた。

ばしゃん、と音がして、じゅっ、と何かが焼けたような音がした。

「い……っ」

後ろでクロが小さな悲鳴をあげた。

僕はそれを聞いて、絶望する。

クロが悲鳴をあげた、ということとは、瓶の中身は少なからずクロにかかってしまった、と言うこと。

男は瓶の中身を全部撒いたから、最悪の場合、クロは溶けて無くなってしまう。

「うぐ、っ」

そこまで考えて、僕は自分の身体に走った鋭い痛み気付く。

「あ、あ」

クロが後ろで呻いている。

その間にも、男は笑みを絶さず、寧ろ深くなっているように思えた。

「合格」

男が咳く。

一体何が合格なんだ。

「お前らすごいよ、俺とスイじゃそこまで行かない」

男はローブの中から再び液体の入った瓶を取り出す。

そしてそれを僕にだけかけた。

冷たい。

でも、それと同時に、身体に走っていた痛みは消えていった。

「……………」

「あれ、俺ってばもしかして忘れられた？」

「はい……………」

一体何を言っているんだ？

僕にこんな知り合い居ただろうか。

「あ、マジで忘れられてる。

スイはどうだ？

覚えてるか？」

「スイ……………？」

クロが声をあげる。

まるで、何かを思い出した、という風に。

「スイが、いる、の…？」

「ん？」

おう、いるぜ。

スイー、お呼びだぞー。」

男がそう言うと、教室の入り口から淡い水色をした髪の男が入ってきた。

「クロ」

その人物は確かにクロの名前を呼んだ。

そして、身体を起こしたばかりのクロに抱きついた。
すごい速さで。

「クロ、く、ろ……………」

「え、あう」

スイと呼ばれた人は、クロの名前を呼び、泣き出した。

クロは当然、困っている。

「よか、っ」

よかった、と言いたいらしい。

「鎌は鎌同士で再会を楽しむっつーことでよっす、アリス」

その男が紡いだ言葉は当に捨てた僕の名前。

「……………どちら様ですか」

「先輩様です」

「……………先輩？」

先輩、と言うと、僕が以前、一人の人間を殺した時にちらっと記憶の片隅に浮かんだ言葉だ。

「すみません、知らないです」

「マジかよ」

でも流石にこれは覚えてるだろ」

そう言つて、自称僕の先輩は、ローブのフードを取った。

そこから出てきたのは猫耳。

どうやら本物らしい、ぴよこぴよこと動いていた。

「……………猫」

「チエシヤ猫だよ」

「チエシヤ、ち・え・し・や」

「相変わらず器用だな」

男は笑うと、僕の頭をわしゃわしゃと撫でた。

乱暴な手付き。

でもどうしてだか、落ち着けた。

「ま、ゆっくり思い出せ」

そう言って、また撫でた。

何でか知らないけど、涙が溢れて来て、初対面である筈のチェシヤ猫に抱きついて泣いてしまった。

その間もチェシヤ猫は僕の頭を撫で続けた。

僕は、涙が止まらなかった。

傍らでは困っていたクロが尚更困っていた。

僕が思うに、クロはこの、チェシヤ猫とスイを知っていて、記憶をここに堕ちた際にはぼ忘れてしまった僕に気を使い、言わなかったのでは、と思う。

クロがあんなに怯えたのは、いきなりチェシヤ猫とスイがこの建物内に入って来たから、臆病なクロはどうすればいいか分からなくなっただけだと思っただけ。

- - - - -

それからというもの、僕はチエシヤ猫のことを先輩と呼び始めた。

というよりは、チエシヤ猫がこの廃校に住み着いたから、どう呼べばいいのか分からないからそういう風に呼ぶようにした。

昔の関係を考えればそうせざるを得ないような気がして。

でも、先輩とスイが住み着いたことによって、この廃校に新しい噂が増えてしまったのは、言うまでもない。

第五話 真相（深層）

噂、といっても、可愛いものだと思う。

僕がしていたことと比べれば。

先輩たちは話し声が聞こえるとか、後ろから肩を叩かれた、とか。

僕は耳元で「殺す」と何回も囁いたり、後ろから首を絞めたり、とか。

先輩たちはかなり可愛い悪戯だ。

やられた方は先輩の方に当たった場合はまだ良いけど、僕とクロの場合は、つまりは呪いみたいなものをかけてる訳だから、された側は精神崩壊すると思う。

実際、発狂した人居たし。

後ろから首を絞められてしまったら窒息じゃなく心臓麻痺でも死ぬだろう。

いきなり首を絞められたらたとえその手に慣れている人間でも一瞬は息が止まるだろう。

ましてや僕の手はかなり冷たいから。

先輩の手は暖かいのに。

それは先輩が堕ちたてであることを示していた。

「先輩、一つ聞いて良いですか」

「なんだよ」

「……どうして此処に？」

その質問に先輩はいとも容易く答えた。

「お前に逢いたくて」

それだけの理由でこの人は禁忌を犯したのか。

「下手すれば二度と逢えませんでしたよ」

「知ってる」

けど、お前が居ない広い部屋に居るのは死ぬほど辛かった

あんな部屋に居るくらいなら、いっそのこと堕ちても良いからお前に逢いたいと思った」

人が一人居なくなるだけで世界ってかなり変わるんだな、と先輩は笑って言った。

「馬鹿ですか貴方は」

僕はあの後眠ってしまった先輩の頭を膝に乗せ、眠っている先輩に言った。

無理に堕ちてしまえば、当然その分の代償を払わなきゃいけないし、下手すれば地面に足をついた時点で消滅する。

僕は身体を払った。

取り返したけど。

一体この人は、何を失ったんだろう。

僕との思い出話をしているから、記憶は失っていない。

大体が僕に逢いに来たのに記憶を渡したら意味が無いだろう。

では、身体の一部か。

でもこの人は五体満足だ。

本当に何を失ったんだ。

ねえ、先輩。

僕はあなたの心の奥に何かあるのか知りたい。

でもあなたはそれを隠す。

どうして？

隠す必要なんか無いでしょう？

隠してもいずればバレてしまう、悟られてしまう、感づかれてしま
う。

あなたにいいことなんかひとつもないのに。

あなたの深層が分からない。

僕に知られたくない理由は一体何？

先輩が流した噂は時が経つにつれて、消えていった。

ねえ、あなたもいつかは消えてしまうの？

第六話 雨の日の過ごし方

ざーざーと音を立てながら、雨が降っている。

朝からずっと降り続けていて、いい加減うんざりなんだけど、雨は結構好きだから良しとしよう。

でも、正直言つて、雨漏りが心配だった。

結構古い建物でしかも木造だし、隙間なんか一步步いただけで最低三つは見つかる。

クロは相変わらず部屋の隅で丸くなっている。しかし、ここ最近人の姿以外のクロの形状は鎌しか見なくなった。

僕は暇をもて余して、先輩の方に這っていく。

「せーんぱーい」

「……そういう感じに呼ばれた記憶がある気がする」

「呼んだんじゃないですかね」

あ、僕に確認取らないでくださいよ
覚えてないんですから」

「……人任せめ」

「人任せじゃないですよ」

あはは、と笑うと先輩はそっぽを向いた。

「ツンデレですか？

猫だけに」

「関連性がよくわからん」

「気まぐれ」

「……………そうかい」

先輩ははあ、とため息をつくとき、窓に目をやる。

雨は弱まることを知らないかの様に、強さを増していた。

窓枠ががたがたと音を立てていて、今にも壊れそうな勢いだ。

「雨、嫌いなんですか？」

「ん」

「何ですか？」

「髪と尻尾がへたれる」

「……………それだけで？」

僕がそれを聞いて笑うとき、先輩は苦笑した。

「湿気がな、やばいんだ」

「どつという風にやばいんですか？」

「さつきから質問ばっかだな」

毛が湿気を吸いとってふにやっつてなるんだよ

見たことないか？

普段はふわふわの天パが雨の日は誰ですか、ぐらいにぺったんこになつてんの」

「クロは猫っ毛になりますよ

ほら、ぴよんぴよん飛び出してるあれ、猫っ毛です」

僕はそういつてクロを指差す。

ク口はきよとんとした顔でこつちを見た。

「ほーう」

「先輩は猫っ毛なんですよね？」

「また質問か。」

「一応猫っ毛。多分。」

見事にへこたれてるけど」「というよりは猫なんだから猫っ毛じゃないとおかしいでしょう」「

「あーハイハイそうですか」

先輩は面倒くさそうに言った。

「僕と話すと面倒くさいでしょう」

「かなりな」

「……僕、先輩のことやっとな好いてきたのに、残念です。」

「俺が悪かった」

やっぴは面倒くさい、と先輩は小さく呟いた。

「……………」

この人は一体何なんだ。

「ちよつと先輩、そこ僕の場所です」

先輩が我が物顔で居座っているのは、じめじめした教室の隅っこだ。

僕はどちらかというと言いつつ湿気を好むから、隅っこという場所は好きだ。

その場所は、湿気を嫌う人に占領されている。

「湿気、嫌なんじゃないですか？」

「いや？」

「さっき嫌いって言ったじゃないですか」

「雨は嫌いと言ったが湿気は嫌いと言っていない」

「……ひねくれ者め」

「なんか言ったかー？」

「いえなにもー？」

こういつどちらにも利益が無い会話は極力避けたかったんだけどな。

「隅っこくれないんだっいたら暇潰しに付き合ってくださいよ」

「ああ？」

「取り引き、です」

「しゃーねーなあ」

雨は激しさを増していたが、僕と先輩はそれに気がつかないくらいに、話し込んでいた。

クロがしつこく構ってくるスイにうんざりして、僕らを見つけるまで。

日はのぼらない(前書き)

予想以上に血みどろになってしまったようです。

日はのぼらない

鳥がわめいていた。

魂が浮き足立っていた。

なんてのは、変わらない筈だったのに覚えた違和感。

その違和感は先輩が帰ってきてても拭いきれなかった。

僕はもともと人に意見を言わないタイプだったので、その時も何も言わなかった。

言ったところで、あの人は何をしてくれるだろうか、と考える。

むしろ

「消える」と吐き捨てるのではないだろうか。

最高それだ。

最低は黙って首が飛ぶのを待つしかないだろう。

「先輩」

「なんだよ」

「なんでもないですよ」

「じゃあ話かけんなよ」

僕はそれ以上は話を続けなかった。

らちが開かない気がしていたから。

でも、やっぱりそれはやって来る訳で。

ぐぐ、と力をこめたクロに影がまとわりつく。

払っても払ってもそれはしつこくまとわりつく。

もうこのことは気にしない。

気にしていたら負けだ。

殺られてしまう。

ざしゅっ、と小気味いい音がして、切っ先が床に触れる。

床に穴が空く。

「誰か転ぶなあ」

僕はそう言いながら、影がまとわりついたままのクロを向こうに向かって振り回した。

びゅ、と風を切ってきていん、と互いの刃がぶつかる。

もうダメなんだろう。

この時点で決まっていたんだろう。

計算づくだったんだろう。

だから僕の体は宙に浮いて、肩から血を噴き出して、クロを手放して、だんだん床に近づいて、ばん、頭をぶつけて、破片が顔に刺さって、クロはその穴により階下に吸い込まれて、僕の体は吸い込まれなくて、黒い影が僕の体を包んで、ぐしゃぐしゃに掻き乱しはじめて、

だから僕の体は赤く染まっていった、内臓がびちゃびちゃと音を立てながら床に落ちていった、次第に僕の体は軽くなっていった、魂が逃げ出して、血だまりができて、階下のクロはぴくりとも動かなくなってしまうって、先輩はどうにぐしゃぐしゃに掻き乱されていて、原型も留めないような姿になっていて、中身が丸見えで、内臓がはみ出して、それでもまだ眼球は動いていて、気味が悪くて、

先輩の鎌のスイだって、教室で遊ばれたのか修復不可能なくらいに

壊れていて、柄が折れて、刃がぼろぼろで、柄と刃は離れていて、じんわりと血が染み出していて、床が黒くなっていった。

この惨劇を産み出した張本人はニヤニヤと笑いながら、自らの喉笛にナイフを刺して自殺した。

ひゅうーっ、と風が抜ける様な音がして、血が溢れ出る。

それを瀕死状態なスイが掬って飲み始める。

やがて、先輩も一緒になって。

がぶ飲みしている。

そんなに飲んだら口のまわりが赤くなって臭くなってしまっただろうに。

「ほら、お前もやれよ」

血を近づけられる。

鉄臭いそれは赤くて、とても飲めそうになかった。

ばちやばちやと先輩の手のひらから床に血が落ちていく。

僕はそれを必死に掬って飲み始めた。

鉄の味。

味は表現しがたいがこんな感じだろう。

水だと思えば結構行けるだろう。

.....

ある学校ではある噂がたっていた。

「旧校舎取り壊しやめたじゃん、あれなんでわかる？」

「なんか出るからじゃないの？」

「違うよ、入ったら最後、戻れないからだよ」

「どっという意味？」

「入ったら死ぬんだよ」

「本当に死ぬんだよねー。」

なんか人食い鬼がいるらしいよ」

「じゃあ今日あたり行ってみる？」

「おっ、いいねー行こう行こう」

「所詮、らしい、でしょー？」

あははは、と笑いながら旧校舎に入っていく少女たちの姿を舌舐めずりしながら見ている人物がいた。

数分後、旧校舎は血の海となる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8944g/>

壊れた時間

2010年10月15日22時12分発行